

学級経営領域授業と教職専門実習Ⅱにおける 学級経営観の変化 —小学校担任教育に着目した教職大学院生の 質的研究—

石川 美智子

Changes in the view of class management in the class management and the teaching practice II
—A qualitative research focus on elementary school teacher educations in graduate students
in the teaching profession graduate school—

Michiko ISHIKAWA

Accepted December 16, 2015

抄録：本研究は、教職大学院ストレートマスターの学級経営領域の授業と、教職専門実習Ⅱにおける学級経営観の変化過程を検討することである。すなわち、学級経営領域の授業の後と実習後に学級経営観がどのように変化したかを明らかにし、特徴カテゴリーを抽出することである。先行研究の少ない分野で有効とされる質的研究法を採用し、質問紙をKJ法で分析した。学級経営領域授業後には、大学院生は学級経営について、《初めての学級経営の演習を通しての学び》《担任力を高める発達・学習の理論》《児童の多面的理解と方策の必要性》《学級経営におけるチーム援助と担任教師の責任》《実習Ⅱにむけての課題》《葛藤》が示された。学級経営領域授業後の実習Ⅱ後には《児童の育ちを支える教職員・保護者との連携》《学級開きからの学び》《学級経営年間計画と安心な学級作り》《担任教師の個性に合った技を持つ》《指導のバランス》《次への課題と対策》が示された。学級経営領域授業の演習と理論と実習の連続したカリキュラムにより、大学院生にとって教育に必要な概念を抽出し反省的教師の育成の可能性を示した。

索引語：担任教育，教職専門実習，学級経営，反省的教師

Abstract : The purposes of this study were 1) to examine a changing process of the view of class management which produced through the class management and the teaching practice II of straight master on the teaching profession graduate school, and 2) to categorize characteristics. A questionnaire survey and the K.J. method were utilized for this study. The analysis identified six categories of the view of class management in students who attend the class management: “learning through their first practice of the class management”, “a developmental and learning theory which build up teacher’s power”, “a necessity of multiple understanding and strategies of children”, “a team support and responsibility for teachers in class

management”, “tasks for the teaching practice II” and “conflicts”. Then, after the teaching practice II, the analysis identified six categories of the view of class management in students who finished the teaching practice II: “teacher’s cooperation with parents which support a growth of children”, “learning from a class beginning”, “developing an annual plan of class management and untroubled class”, “improving teacher’s skill which is fitting their personality”, “teaching balance” and “next tasks and strategies”. Discussion of these findings referred to effects of a sequence of the class management and the practice teaching in the curriculum on the undergraduate student, and presented the possibility of cultivation of a reflective teacher.

Key words: teacher educations, teaching practice, class management, reflective teacher

1. はじめに

文部科学省は、「学級・ホームルームという場において、一人一人の児童生徒の成長発達が円滑にかつ確実に進むように、学校経営の基本方針の下に、学級・ホームルームを単位として展開される様々な教育活動の成果が上がるよう諸条件を整備し運営していくことが、学級経営およびホームルーム学級と言われるものです」と述べている（文部科学省，2008）。そして、学級経営の内容の具体例を示している（文部科学省，2006a）。しかし、文部科学省は学級経営の定義を示さず、内容は非常に曖昧である。

一方、アメリカでは、すべての生徒の学びを保障するために教師は何を知る必要があるのか、何をすべきかに焦点を当てて提言し、教師教育に示唆している（Hammond & Snowden, 2005）。また、佐藤（2015）は日本の教師の危機の本質は、教師教育（研修）の高度化と専門職化の遅れにあると述べている。多くの若手教師は、担任教師として学級経営の担い手となる。しかし、教師教育は論議されているが、学校経営の基本となる学級経営とそれを担う担任教師については、筆者の知る限り論じられることは少ない（住野・田中，1999；下地・城間，2010）。学部において一部の大学では「学級経営論」等を開講しているが、生徒指導や教職実践演習等で学級経営を部分的に扱うというのが現在の実態である。そのため、教師を目指す学部生には、学級経営や担任の役割を学ぶ機会が少ないと考えられる。

そのような中、文部科学省（2006）は、学部段階での資質能力を修得した者の中から、さらにより実践的な指導力・展開力を備え、新しい学校づくりの有力な一員となり得る新任教員の養成等を目標に教職大学院を設置した。教職大学院において共通的に開設すべき授業科目の領域（5領域）の一つとして、学級経営、学校経営に関する領域を必修科目とした。しかし、ストレートマスターを対象とした学級経営に関する領域の授業（以下学級経営領域授業と記す）の報告は少ない（小林・橋口・水落，2010；木下・江川・藤原；2015）。小林・橋口・水落（2010）の研究では、他大学の教職大学院生と力量のある教員とをTV会議で結んで、多地点間の交流授業が行われた。大学院生は、教育現場で直面する複雑な状況と絡めた深まりのある交流ができたとしている。木下・江川・藤原（2015）の研究は、学級経営領域授業において担任教師経験者をメンターとしたストレートマスターの学級経営のイメージを報告している。石川（2015）は、教職大学院ストレートマスターの学級経営観を明らかにしている。教職専門実習Ⅰをとおして、学級経営観が、抽象的なものから明確化されていることを明らかにしている。石川（2015）の研究は、学級経営授業の受講前のものである。文部科学省（2006）

は、教職大学院においては、学部段階における教育実習をさらに充実・発展し、実践的な指導力の強化を図る観点から、10単位以上の「学校における実習」（教職専門実習）を含めることが適当であるとしている。ストレートマスターの学級経営領域授業とその後の教職専門実習で、学級経営観の変化過程を明らかにしたものは、筆者が知る限りない。

本研究では、教職大学院の学級経営領域の授業及び教職専門実習Ⅱにおけるストレートマスター学級経営観の変化過程を検討する。佐藤（2015）は、教師の専門性は「専門的で実践的な知識と見識」に求められてきたが、「知識と見識」はいかに教育し学ばれるのかについては、今なお論争的問題であると述べている。学級経営領域授業と教職専門実習をととしたストレートマスターの学級経営観を明らかにすることによって、担任教育の参考になると考える。

2. 研究方法

(1) 研究方法

研究方法は、質的研究方法であるKJ法を用いた。KJ法（川喜多，1967）とは一行見出しによる質的分析法である。この分析方法の特徴としては、時間経過に伴う変化の全体像を明らかにすることができるといわれている（塩満，2013）。「教職大学院生は、学級経営領域授業と教職専門実習Ⅱにおいて学級経営観がどのように変化したか」というリサーチクエッションのもと、質的研究の中のKJ法が適していると考えこれを用いた。なお、研究協力者は、教職専門実習がⅠとⅡの2回あり、教職専門実習を以下実習と記す。学級経営領域授業は、実習Ⅰと実習Ⅱの間に行われた。本研究の調査時期と学級経営授業と実習の関係を表1に示す。本研究の調査は、第3、4回調査にあたる。第1、2回調査の結果は、石川（2015）で述べている。

表1 本研究の調査時期と学級経営授業と実習の関係

1 年生					2 年生	
第1回調査 (6月)	実習Ⅰ (9月より 15日間)	第2回調査 (10月)	学級経営 領域授業	第3回調査 (2月)	実習Ⅱ (4月より 35日間)	第4回調査 (6月)

← 本 研 究 の 期 間 →

(2) 研究協力者

本研究の協力者は、以下の要件をすべて満たすストレートマスター9名（男4名，女5名）である。
①学部において教育実習および大学院1年生における15日間の実習Ⅰ，さらに，大学院2年生における35日間の実習Ⅱを終えた者，②学級経営領域授業の履修者，③教職経験のない者である。研究協力者を学部生と区別するため，大学院生と記す。

(3) 学級経営領域授業の概要

「学級経営の実践と課題」（全15コマ）の授業の概要を表2に示す。

15コマの前半は、学校経営と学級経営の関係、学級経営に関する基本的理論を示した。学級経営の理論としては、リーダーシップ理論・発達と学習の理論や、児童生徒理解としてアセスメントの方法とその対応を考えた。それらを基本に、小・中学校の現職の担任が執筆した1年間の学級通信の分析を行った。そして、演習として学級経営計画、学級開きの指導案、学級のトラブルの対応の指導案

を作成した。演習で作成した学級経営年間計画案と各指導案は、他の授業で学習した理論や文教政策も参考に、自分なりに理論根拠を示すことを指示した。学級経営年間計画案と各指導案は、小中高の校種ごとに5～6人程度の班を形成させ、その中で発表し検討を行った。そして、各班代表者1名を選び、受講者全員の前で10分程度模擬授業を行った。その後、受講者全員が評価した。さらに、保護者への対応の演習を行った。実務家教師として50代の中学校教員が各授業の最後に助言した。

表2 「学級経営領域」(全15コマ)の授業の概要

目標	・学級経営の意義と重要性、その今日的課題と学級担任の果たす役割について理解する。 ・学級経営に関する基本的事項について演習課題を通じて理解し、フィールドワークをとおり深める。 ・学級経営における集団指導と個に応じた指導、保護者との連携のあり方を明確化する
回	内 容
1	オリエンテーション 「教師のキャリアデザインを考える」
2	学級経営力の構築 「学校経営と学級経営の機能を理解する」
3	学級経営の基礎理論 「基本・発達と学習の理論、児童生徒の育ちのために必要な2つの機能」
4	学級経営の基礎理論 「児童生徒理解とアセスメントの方法」
5	学級経営の分析 「学級通信から見た学級経営」
7	学級経営の演習 「学級経営年間計画案作成」
8	フィールドワークの事前指導
9・10	フィールドワーク 「小学校道徳の授業の見学」
11	フィールドワークまとめ
12	学級経営の演習 「学級開きの指導案作成と演習」
13	学級経営の演習 「学級トラブルの対応指導案作成と演習」
14	学級経営の演習 「保護者への対応」
15	授業全体のまとめ

(4) 質問紙

分析にあたって、質問紙調査を行った。質問紙は、「学級経営をどのように捉えているか」である。同じテーマでストレートマスター1年生の学級経営領域の授業後の2014年2月と、2年生の実習Ⅱを終えた6月に実施した。

(5) 分析手順

データ分析はKJ法を用いた。質問紙によって得られた文字データに、分析ワークシートを用いてコード名をつけた。ストレートマスター1年生が自由に書いた内容の要点をカードに記述して、問題点をデータ化し、カテゴリー化を行った。

(6) 倫理的配慮および客観性の担保

研究協力者に対し、口頭により、研究の目的、データ化、論文化に伴うプライバシーの配慮の方法について説明し同意を得た。

データの客観性、内容的妥当性の向上のためのトライアングレーション（Dnezin, 1989）として、一定の客観性を確保するよう努めた。具体的には、教職大学院の研究者・実務家教員によるスーパービジョンを受けた。また、同様に大学院生への確認も行った。大学院生のチェックは2回実施し、1回目は概念生成したワークシートの確認、2回目はストーリーラインの確認である。その際、寄せられた意見に基づきワークシート・ストーリーラインの確認を行った。

3. 結果の分析及びカテゴリーの説明

分析資料から「意味的なまとまりを持った一連のやりとり」（山本, 1995）すなわちエピソードを学級経営領域の授業後120個、実習後67個特定した。その結果、大カテゴリーを学級経営領域の授業後、実習Ⅱ後それぞれ6つ抽出できた。大カテゴリーを《 》，中カテゴリーを【 】, 小グループを< >, エピソードを「」で表す。ただし、実習Ⅱ後では小グループはなかった。

(1) 学級経営領域授業後の学級経営観

学級経営領域授業後における学級経営観のエピソードと概念図を表3と図1に示す。

学級経営領域授業後の大学院生の学級経営観は《初めての学級経営の演習を通しての学び》《担任力を高める発達・学習の理論》《児童の多面的理解と方策の必要性》《学級経営におけるチーム援助と担任教師の責任》《実習Ⅱにむけての課題》《葛藤》の6つの大カテゴリーから成り立っていた。

大カテゴリーを学級経営領域授業の演習に関わる概念、学級経営領域授業の理論に関わる概念、学級経営領域授業以外に関わる概念にわけることができた。まず、学級経営領域の演習に関わる概念をあげる。大学院生の《初めての学級経営の演習を通しての学び》として【学級経営観を深める】【広い視野で綿密に行う学級経営】【担任教師の本気と児童の成長】が示された。【学級経営観を深める】では、<やってこなかった演習>として、初めて<学級経営を考える>機会になった。【広い視野で綿密に行う学級経営】では、<学校目標を還元した学級年間計画><一年を見通した綿密な学級経営><学級集団作り><児童ばかりでなく保護者も意識した学級通信>があげられた。大学院生は「学級のみに目が行ってしまいがちだが、学校教育目標を考える必要を痛感したのは本講義の中で学級経営の年間指導計画を作成した時である」と述べている。また、「4月当初から一年を通して来年3月の段階で児童たちにどのような力をつけたいのかという見通しを持たせることが重要であるということに気付いた」「学級通信は児童・生徒にとっても楽しんで読め、保護者にとっても知りたいことが一目で分かるということを意識して書かなければならないのだと学んだ」と広い視野における学級経営観を持つことができたと考えられる。【担任教師の本気と児童の成長】では、<担任教師の本気の重要性><や<学級開きからの児童の成長>が示された。「児童役をしてくれた院生のコメントには、1つひとつの言葉の力強さに先生役の院生の、いじめについて真剣に考えてほしいと思う真剣さが伝わってきたと書かれていた」と児童に対する担任教師の姿勢が述べられた。

次に、学級経営領域授業の理論に関わる学級経営観をあげる。《担任力を高める発達・学習の理論》では、【発達・学習理論は担任力を高める核】【グループワークでの発見】が示された。【発達・学習理論は担任力を高める核】では、<児童生徒の望ましい発達を支える理論><発達・学習理論が児童を理解する教師の姿勢をつくる>が示された。そして、大学院生は「ある程度の発達過程を知っていれば、児童がなぜこのようなことをしたのか考えるきっかけにもなり、児童を理解することにつながる」とし、物差しとしての理論を述べていた。また、【グループワークでの発見】として、「さまざ

表 3 学級経営領域授業後における学級経営観のエピソード

	大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	エピソード
学級経営領域授業の演習に 関わる概念	《初めての学級経営の演習を通しての学び》	【学級経営観を深める】	＜やってこなかった演習＞	印象に残ったことは、学級開きの学習指導案や学級経営年間計画表を作成したこと。今までに教科や特別活動、総合的な学習の時間といった児童生徒の学習に関する学習指導案を作成したことはあったが、学級開きや学級経営については、年間計画案などを作成したことがなかったからだった。
			＜学級経営を考える＞	学級経営年間計画表、学級開き、生徒指導案の作成によって自分が教壇に立った時を想定した「自身の学級経営観」を深める契機となった。学級経営年間指導計画を作成することで変化したのは学級経営観で、見通しをもって計画を立てることの必要性を実感した。
			＜学校目標を還元した学級年間計画＞	学級のみが目が行ってしまいがちだが、学校教育目標を考える必要を痛感したのは本講義の中で学級経営の年間指導計画を作成した時である。
			＜一年を見通した綿密な学級経営＞	4月当初から一年を通して来年3月の段階で児童たちにどのような力をつけたいのかという見通しを持たせることが重要であるということに気付いた。児童一人ひとりの実態に即した学級経営も大切であるが、教師が理想とする学級をあらかじめ想定することで見通しのある指導が実現する。
			＜学級集団作り＞	学級経営をするうえで大切なことは、教師と児童、児童と児童の縦と横の関係をしっかりと築くことである。関連させて考えることが子どもたちの能力の向上や結束力のある学級集団作りにつながっていくのではないかな。
学級経営領域授業の理論に関わる概念	《担任力を高める発達・学習の理論》	【担任教師の本気と児童の成長】	＜児童ばかりでなく保護者も意識した学級通信＞	学級通信を発行する期間や内容によって配置を変えるなど先生方が工夫を凝らしていることが驚き取れた。学級通信は児童・生徒にとっても楽しく読めて、保護者にとっても知りたいことが一目で分かるということを意識して書かなければならないのだと学んだ。
			＜担任教師の本気の重要性＞	児童役をしてくれた院生のコメントには、「1つひとつの言葉の言葉の強さに先生役の院生のいじめについて真剣に考えてほしいと思う真剣さが伝わってきた」と書かれていた。10月20日の講義にて、研究者の先生、実務家の先生から「児童生徒は、『わたしたちのために、この先生は考えているのかな』と、直感で分かるのだ。」という助言を思い出した。
			＜学級開きからの児童の成長＞	そして、学級開きから日数を重ねるうちに児童の実態とすりあわせてその学級にしかないよさを構築することが可能になるのではないかと感じた。小学校1年生の学級開きの指導案を考える際には、まず学校に取れさせることややい学校には必ずやらなければならないルールがあるなどの当たり前のことが当たり前にできるようにするための教育が必要であると考えた。
			＜児童生徒の望ましい発達を支える理論＞	これまでは、実感を積み重ねることが、教師の力を高めるための核をなすものであったと考えてきた。その前にできることはやはり理論を身につけることだと感じる。子どもの発達理論を学んだことや、各レポートに理論背景を明確に記したことによって、理論を元に見立てを行うことの重要性を感じた。
			＜発達・学習理論が児童を理解する教師の姿勢をつくる＞	学級経営をするうえで発達について教師が知識を持つていくことはとても重要なことだと気付いた。ある程度の発達過程を知っていれば、児童がなぜこのようなことをしたのか考えるきっかけにもなり、児童を理解することにつながる。児童同士が関係を築くためには、まず教師と児童の関係をしっかりと作ることが大切である。その時にも発達にもとづいて児童を理解しようとする姿勢が必要になると感じた。
学級経営領域授業の理論に関わる概念	《児童の多面的理解と方策の必要性》	【グループワークでの発見】	＜グループワークで指導や理論の多様性の発見＞	教師チームで分析・方策を考えるということが重要である。さまざまな知恵・思考を教員が持ち寄り意見を出し合うことで、1人で出なかった方向へ開けるという教師がチームで取り組む大切さを、本講義で実際にグループワークをおこなうことを通して学ぶことが出来た。
			＜アセスメント＞	私が学級開きの指導案を作成する際、児童生徒のアセスメントを正確に行わなければ、有効な手立てを講じられないところに難しさを感じた。15回の授業を通して学級経営に最も必要だと感じたことは児童生徒理解である。「見えない部分を見る」と言っているものの、他のアセスメントでも同様であると考えられる。学級開きには常に児童生徒を多面的に理解する力が必要と求められる。実際にはどのようなようにすればよいのか具体的な方法が分からずいたのだが、本講義を通して、適切なアセスメントを行うことが児童理解・保護者理解につながるということを学んだ。

			【教師の適した方策】	＜児童アセスメントから適した方策＞	目的や信念を持ち、児童の実態と理論（発達・学習・アセスメント）を照らし合わせ、適した方策を講じるからこそ取り組み1つにしても効果があ る。私はアセスメントの重要性を思い知らされた。児童アセスメントをして適切な対応をする教師の姿勢から、児童生徒との信頼関係が生ま れる。
学級経 営領域 授業以 外に関 わる概 念	《学級経営におけるチーム 援助と担任教師の責任》	【担任教師に託された学級 経営】	＜チームとしての学級経営支 援体制とその課題＞	＜子どもたちのためにも自分のた めにも学級経営に全力を注ぐ＞	常に他教員や他学級、学校全体に対する目線を配り、自分自身に余裕がない時だからこそ周りのことも考えた行動を意識することで、互いに助 け合える体制作りを自ら行い、自分一人で抱え込まずに必要がある。学級経営の進め方を常に他教員と共有・見つめ直しを図り、児童の 影に潜んでいる問題にいち早く気づき、対応しながら、学級経営を進めることができると考える。
	《実習Ⅱにおける課題》	【学級経営の課題意識を持 つ】	＜個人と集団の指導＞		教師側の視点に立てば、学級の状況が主眼に対するモチベーションに大きく左右されることは間違いない。子どもたちのためにも、自分がより 良く仕事ができるためにも（それが結局子どもたちのためになる）、学級経営に全力を注ぐのは至極当然だと言える。普段から児童たちの SOS をすばやく察知するためにもそれらの根底として学級経営力が必要不可欠であると感じた。
		【担任教師からの学び】	＜自分が課題と向き合うこと で子どもの成長を促す＞	＜担任像の再構築＞	次の学級専門実習での自身の課題は個人と集団の指導についてである。児童一人一人を理解することに努めなければ集団での指導はできないと 強く感じた。教職専門実習Ⅱでは実習前に発達について再度勉強したいと考えている。4月から7週間の教育実習が始まり、学級経営のスタート 地点を間近で学ぶ機会を得る。7週間の実習が有意義なものになるためにも今から日々課題意識をもち理論を身につけたり理論をもとに研究や学 級経営の方針を固めていきたい。
	《葛藤》	【実戦力を磨く】	＜信念・理論と向き合いながら 内省＞	＜信念・理論と向き合いながら 内省＞	教師から心の声を聴き取られる喜びを感じることができるところこそ、自らの課題をしっかりと受け止め、向き合うことができ、子どもの心は育つ ていく。教師が「心を育てる」、子どもの「心が育つ」とは、決して離れてはならない関係なのである。
		【不安】	＜キャリア適応力を伸ばす＞	＜キャリア適応力を伸ばす＞	自分が教師に立ったときに、その体験を基にして学級経営を進めることができる。教職専門実習Ⅱでの新たな目標として「理想とする学級経営 を阻害する要因の確認」を加え、自身の教師像の再構築を図りたい。
			＜不安＞	＜不安＞	SL 理論や PM 理論などを用いて自分の担当学級を客観的に内省する必要があるということを実んだ。時には立ち止まって自分自身と対話をする。 その中で自分の信念と向き合い、理論の引き出しと向き合いながら、適した実践を編み出せる教師でありたい。
			＜不安＞	＜不安＞	現在の自身の課題として、もう1歩踏み込んだ思考をし、目的意識や信念を明らかにするとともに、自身のキャリア適応力を伸ばすことで具体 的に実践で役立つ力を磨きたい。
			＜不安＞	＜不安＞	つまりは保護者との関係構築も大切だということだ。学級経営は家庭にまで広がり、それは近年著しいものになっている。しつこくまで学校に求 められているのがその良い例だろう。課題を進めていく中で、班のメンバーで共通している不安があった。それは「ストレス」である。原因の 1つは、保護者対応や地域住民との交流の重要性が如く出ていることに伴って日々の業務がますます激務となっているためと考えられる。
			＜不安＞	＜不安＞	授業も生徒指導も学級経営の中に組み込まれたもの。授業力や生徒指導力があるだけでは学級経営はできない。そしてそのためには学級経営に 関する理論を学ぶ必要があると強く感じる。学級経営の実践から得られる理論の構築が必要不可欠だと深く考えさせられた。そもそも学級経営 に関して学べる場がないことが（理論がきちんと構築されていないことも含めて）学級経営の課題として挙げられるのではないかと考える。
			＜不安＞	＜不安＞	私が講義で作成した学習指導案や学級経営の年間計画案を教育現場で実践するには、まだまだ多くの補填や手立てが不足している。校務をこな して・・・教師は一体どこで教師力を、学級経営力を伸ばせばいいのだろうか。

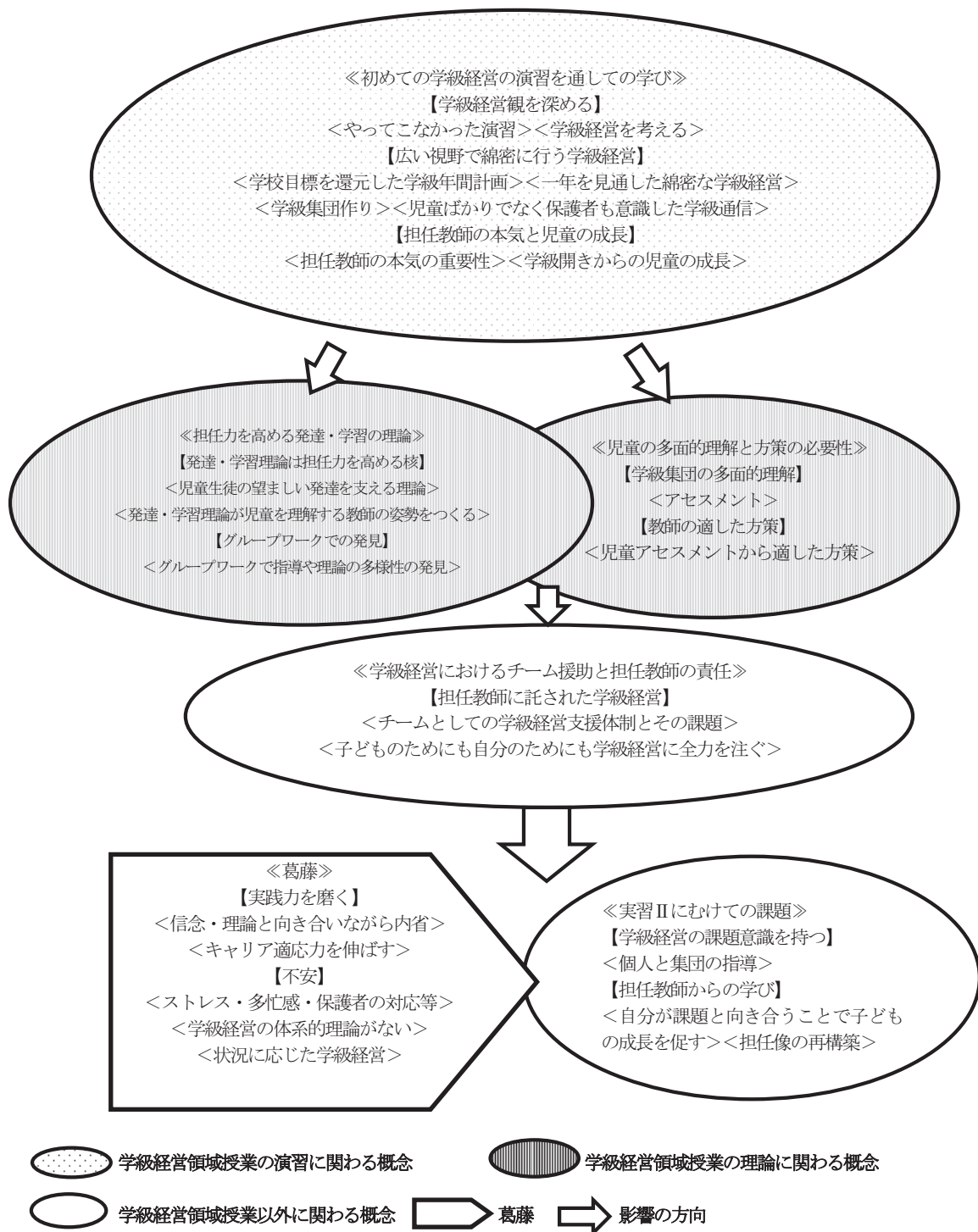


図1 学級経営領域授業後における学級経営観の概念図

まな知恵・思考を教員が持ち寄って意見を突き合わせることで、1人では開けなかった方向へ開けるという教師がチームで取り組む大切さを、本講義で実際にグループワークをおこなうことを通して学ぶことが出来た」と＜グループワークで指導や理論の多様性の発見＞をした。

《児童の多面的理解と方策の必要性》では、【学級集団の多面的理解】【教師の適した方策】が示された。「実際にはどのようにすればよいのか具体的な方法が分からずにいたのだが、本講義を通して、適切なアセスメントを行うことが児童理解・保護者理解につながるということを学んだ」と、【学級集団の多面的理解】のための＜アセスメント＞を知った。その上で、「目的や信念を持ち、児童の実態と理論（発達・学習・アセスメント）を照らし合わせ、適した方策を講じるからこそ取り組み1つにしても意味がある」と＜児童アセスメントから適した方策＞による学級経営観を持った。学級経営領域授業以外に関わる概念も明らかになった。《学級経営におけるチーム援助と担任教師の責任》では、【担任教師に託された学級経営】が示された。＜チームとしての学級経営支援体制とその課題＞があるが、基本としては、＜子どものためにも自分のためにも学級経営に全力を注ぐ＞ことを感じている。

《実習Ⅱにむけての課題》では、【学級経営の課題意識を持つ】【担任教師からの学び】が示された。特に【学級経営の課題意識を持つ】では、＜個人と集団の指導＞である。【担任教師からの学び】によって＜自分が課題と向き合うことで子どもの成長を促す＞ことができると捉えている。そして＜担任像の再構築＞を考えている。

《葛藤》では【実践力を磨く】ことと【不安】が示された。大学院生は【実践力を磨く】ため＜信念・理論と向き合いながら内省＞することや＜キャリア適応力を伸ばす＞ことが必要であると理解した。しかし、＜ストレス・多忙感・保護者の対応等＞＜学級経営の体系的理論がない＞＜状況に応じた学級経営＞が必要という【不安】も抱えていると思われる。

(2) 実習Ⅱ後の学級経営観

実習Ⅱ後における学級経営観のエピソードと概念図を表4と図2に示す。

表 4 実習Ⅱ後における学級経営観のエピソード

	大カテゴリー	中カテゴリー	エピソード
学級以外 の育 ちに関 わる概 念	《児童の育ちを支える 教職員・保護者との連携 》	【児童の成長をみる喜び】	課外活動であっても、教員が明確に意図・目的を持って指導を行うことにより、児童の頑張る姿や活躍する姿を新たに発見することもできる。 児童が日々成長している姿を見て喜びを感じることができた。
		【学級以外での児童の育ち】	学級経営は担任だけでなく、教職員・保護者などを見る中で、それぞれの行事や日々の教育活動が多 くの教職員の連携・協力によって成り立っていることを知った。
		【学校・学年・保護者の願いと担任 教師の連携】	学級経営は学級担任と学級の児童だけでなく、教職員・保護者などの連携・協力の下、行われているのだからということを感じた。連携していくことの大切さを感じた。その中には学校全体の願いや保護者の願いなど様々な願いが込められている。小さいまともりで学級を捉えるのではなく、学年といつたまともりで考えると、学級は1人の担任教師とその学級の子どもたちだけで成り立っているわけではない。
学級経 営領域 授業演 習に関わ る担任教 師からの 学びの 概念	《学級開きからの学び 》	【学級開きの意義の理解】	学級開きからの約2ヶ月間という学級経営の基礎となる重要な時期を見られたことは大きな学びであった。学級開きは各当番の担当を決めるだけに終わった。私が入らせて頂いた学級開きは、なぜ学級があるのかを再認識させられるものだった。学級経営を学級開きから見せていただき、先生がどういった考え方で、どのような方向性をもって児童達を導いていこうとしていっているのかを間近で知ることが出来たのが今回得た学びの1つである。
		【発達段階に応じた指導を具体的に 学ぶ】	1点目は発達段階に応じた指導や支援でより具体的に、より丁寧な指示が何よりも大切だということを生徒方の児童への指導の仕方を見たり、児童との関わりを通して学び、実践を行った。担当学級（3年生・ギャングエイジを象徴するもの）のような、課題をもつ児童が多い学級。担当学級（5年生・全体的に落ち着いた雰囲気、素直で児童同士が認め合える学級）の先生は褒めることに重点を置かれた指導をされていた。
		【担任教師の教育目標と児童集団の 変化】	学級開きから学級が出来ていく様子の間近で観察することができた。先生方が4月の段階で取り組んでいる活動の実態と、それに伴う児童集団の変化を確かめることができた。4月当初は新しい友達や先生ということで緊張している様子があったが、教師がこのような学級を作りたいと具体的に口にする中で、児童もまとまっていた。
		【前年度3月からの計画と見直し】	また、少しそれてきたなと思った時期にも最初に目標を提示しているのも軌道修正がしやすい。学級経営面でも、学級開きをする際にすでに来年3月の段階でどのような学級にしたいのかを見通す必要があると実際に学級開きを見させていただくことで学んだ。児童がより安全に、安心して学校生活を送るために年間学級経営を計画的に進めていく必要があると感じた。
		【担任教師から児童への積極的な関 わりの必要性】	児童との関係作りは常にこちらから関わりを積極的にかけるということが必要だと改めて感じた。
実習Ⅱに おける 担任教 師から の学び の概念	《担任教師の個性に合 った技を持つ》	【個人を生かす集団作りの技】	褒める際は当該児童のどのような点かのように良かったのか、他の児童に分かちやすく具体的に伝えるようにされていた。学級全体に向けて当該児童の良いところを伝えるということもされて、それは、当該児童の自己肯定感を高めるだけでなく、他の児童たちも当該児童の良さに気づいて認められるように、帰りの会に今日のここにこさん、きらきさん（今日一日を通して頑張った人）を決めるなどの活動を取り入れることで、子どもたちが意欲的に学校生活を送れるようになるのではないかと考えた。
		【担任教師が児童一人一人と関係を つくる技】	教師は児童との関係をきちんと作るということ丁寧に行っていた。名前をたくさん呼ぶということである。今日の間の答えを学級の児童全員が先生の座っておられる教卓まで言うに行くシステムを作っておられ、学級経営での具体的な技を間近で学ぶことができたことはとても大きな収穫である。
		【学級の課題を個人の問題として考 え解決させる技】	担任の先生は学級内での様々な場所や課題が見つかるたびに、どうすれば解決できるかを全員で話し合いながら、児童一人ひとりが自分の課題として捉えられるように徹底していた。
		【困難をかかえた児童の学級での居 場所作りの技】	自己肯定感が低くプリントに死と書いていたり、大きな声で不満を言うたりする課題を抱える児童に対する褒め方で、日常の中で褒めることももちろんあるが、授業中に児童を褒めるということを常に意識されていた。

その他 の概念	《指導のバランス》	【担任教師の指導のバランス】 課題をもつ児童が多い学級の先生は女性的な指導を重視されており、児童をきちんと叱ることの必要性を学んだ。担当学級（5年生・全体的に落ち遅れており、素直で児童同士が認め合える学級）の先生は褒めることに重点を置かれた指導をされており、児童の自己存在感・自己肯定感を向上させる指導の在り方を学ぶことができた。4月のはじめには作業の取り掛かりに長い時間を要していた児童も、5月の終わり頃では自分たちで気づいて素早く行動に移し、周りにやさしく声掛けをしている姿が多く見られた。他の実習生が担当していた学級では、学級内のルールや、授業・給食・掃除等の活動の取り組み方などの“学級内規律”を具体的に明示し、徹底して児童に守るように指導していたところもあった。児童を指導することに慣れて叱る・褒める、厳しさ・優しさについて何度も触れているが、どちらが大切かというのではなく、どちらもバランス良く兼ね備えていることが重要なのだと改めて考えさせられた。
		【担任教師の存在と安心な学級作り】 担任教師をはじめ、学級の中で自分の存在を認めてくれる人がいる、という安心感があるのと無いのとでは、児童の持つ自己存在感や自己肯定感の度合いが全く違うように思われる。学級規律と児童集団、学習環境が相互的に働きかけることで、児童がより安全に、安心して学校生活を送れる。
	《次への課題と対策》	【授業における多様な課題】 児童と向き合う余裕を持てるように授業力を向上させていくことも学級経営につながると今回の実習で気付くことができた。しかし授業の中で集団と個への指導を同時に行うのはとても難しいことだと実感した。残りの大学校生活を活用して、授業面の見通しをもつために学習していきたい。児童の発言を全体的に広げ、全体で考えることに集団で学ぶ意義があると考えているが、発言をどのように広げることが課題である。
		【学級集団と多様な個性と課題をかせいた児童の指導】 学級の中には様々な個性の児童がおり、それぞれ異なる課題を抱えているが、このことを把握し、その児童に今必要な力をつけることが教師の役割であると考えているがととても難しい。教職専門実習での自身の課題は個と集団の指導についてであった。
		【児童への先入観の反省と児童理解】 また〇〇君は△△をしているのか・・・というように、先入観だけで判断してしまいうこともあった。マイナス面の先入観や手立てばかりに視点が向き、児童の生まれもった可能性に気付くことができなかったためである。4月下旬には家庭訪問があるが、保護者に学校の児童の様子について話し信頼関係を築くためにも、短期間で児童の実態や様子を観察・分析し、児童理解をしなければならぬ。
		【多忙さへの対策】 学級経営の困難や課題は多忙さに起因しているのではないかと考えた。これを克服していくためには組織として効率的に動いていくことと個々の事務処理能力をあげていくことが必要であると考えた。学級担任をされている先生方は校務分掌の企画立案や保護者の方への連絡、事務手続きなど様々な職務を全うされている、すべき仕事に優先順位をつけ、一つ一つの仕事を進めていくことで児童のための時間を確保することが難しいことが分かった。

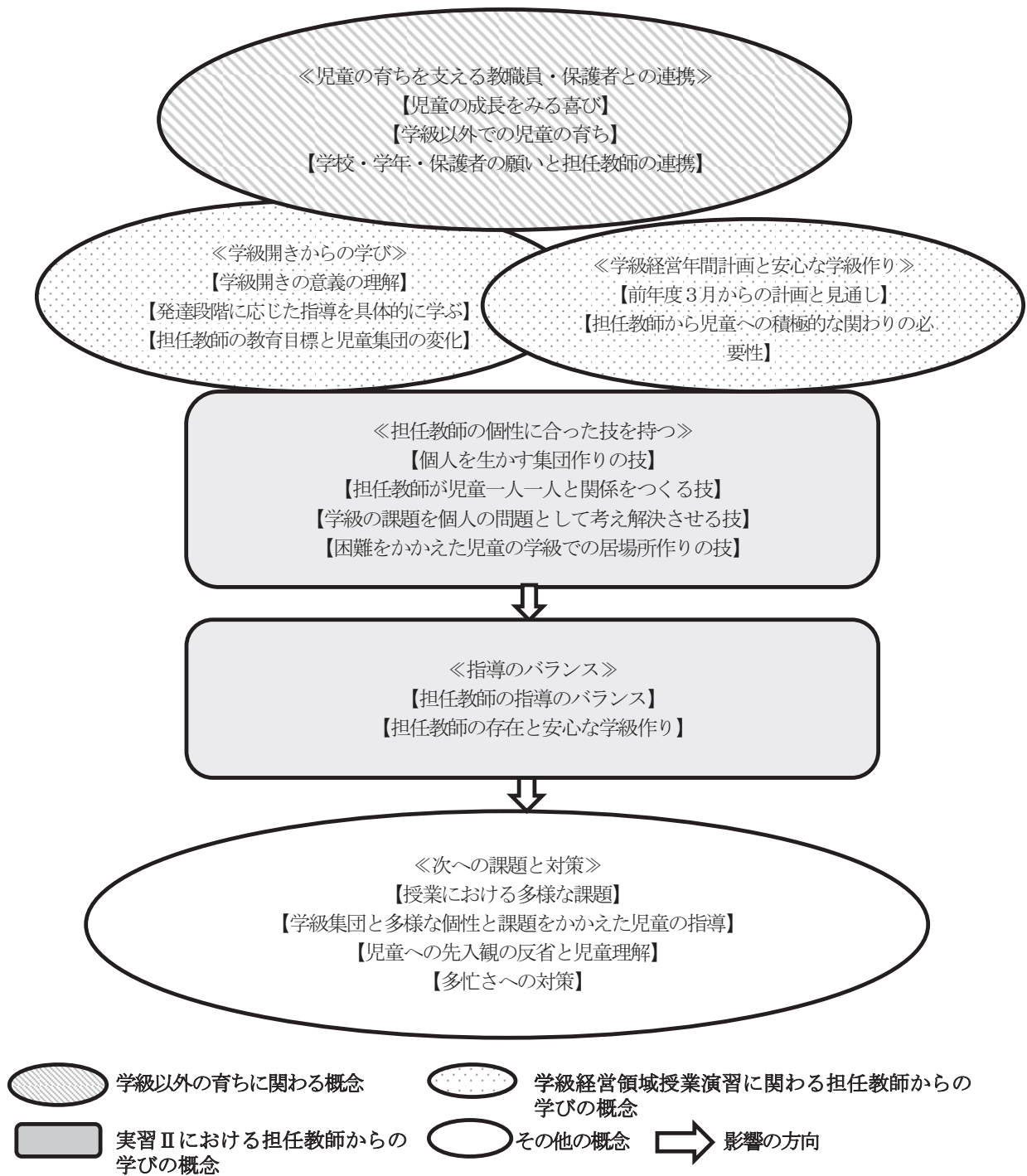


図2 実習Ⅱ後における学級経営観の概念図

実習Ⅱ後の大学院生の学級経営観は《児童の育ちを支える教職員・保護者との連携》《学級開きからの学び》《学級経営年間計画と安心な学級作り》《担任教師の個性に合った技を持つ》《指導のバランス》《次への課題と対策》の6つの大カテゴリーから成り立っていた。

大カテゴリーを学級以外の育ちに関わる概念、学級経営領域授業演習に関わる担任教師からの学びの概念、実習Ⅱにおける担任教師からの学びの概念、その他の概念にわけることができた。

まず、学級以外の育ちに関わる概念をあげる。《児童の育ちを支える教職員・保護者との連携》では、【児童の成長をみる喜び】【学級以外での児童の育ち】【学校・学年・保護者の願いと担任教師の連携】が示された。大学院生は「課外活動であっても、教員が明確に意図・目的を持って指導を行うことにより、児童の頑張る姿や活躍する姿を新たに見つけることもできる」と、児童の成長を捉えた。そして、「学級経営は学級担任と学級の児童だけでなく、教職員・保護者などの連携・協力の下、行われているのだということを学んだ」「連携していくことの大切さを感じた、その中には学校全体の願いや保護者の願いなど様々な願いが込められている」と、学級以外の育ちと連携を感じていた。

学級経営領域授業演習に関わる担任教師からの学びの概念をあげる。《学級開きからの学び》では、【学級開きの意義の理解】【発達段階に応じた指導を具体的に学ぶ】【担任教師の教育目標と児童集団の変化】が示された。「学級開きからの約2ヶ月間という学級経営の基盤となる重要な時期を見られたことは大きな学びであった」「学級開きは各当番の担当を決めるだけに終わった。私が入らせて頂いた学級開きは、なぜ学級があるのかを再認識させられるものだった」と【学級開きの意義の理解】を示した。また「発達段階に応じた指導や支援でより具体的に、より丁寧な指示が何よりも大切だということを先生方の児童への指導の仕方を見たり、児童との関わりを通したりして学び、実践を行った」と【発達段階に応じた指導を具体的に学ぶ】。特に、「先生方が4月の段階で取り組んでいる活動の実態と、それに伴う児童集団の変化を確かめることができた」等【担任教師の教育目標と児童集団の変化】の関係を実際に確認した。

《学級経営年間計画と安心な学級作り》では、【前年度3月からの計画と見通し】【担任教師から児童への積極的な関わりの必要性】が示された。担任教師が、「学級経営面でも、学級開きをする際にすでに来年3月の段階でどのような学級にしたいのかを見通す必要があると実際に学級開きを見せていただくことで学んだ」「少しそれてきたなと思った時にも最初に目標を提示しているので軌道修正がしやすい」ことを明らかにした。大学院生は計画や見通しを生かすために「児童との関係作りは常にこちらから関わろうと積極的に話しかけるということが必要だと改めて感じた」と【担任教師から児童への積極的な関わりの必要性】も感じていた。

実習Ⅱにおける担任教師からの学びの概念をあげる。《担任教師の個性に合った技を持つ》では、【個人を生かす集団作りの技】【担任教師が児童一人一人と関係をつくる技】【学級の課題を個人の問題として考え解決する技】【困難をかかえた児童の学級での居場所作りの技】が示された。具体的には、【個人を生かす集団作りの技】では、「褒める際は当該児童のこういった点がどのように良かったのか、他の児童に分かりやすく具体的に伝えるようにされていた」「学級全体に向けて当該児童の良いところを伝えるということをされて、それは、当該児童の自己肯定感を高めるだけでなく、他の児童たちも当該児童の良さに気付いて認められるように」等担任教師から学んでいた。【担任教師が児童一人一人と関係をつくる技】では、「名前をたくさん呼ぶということである」「今日の一問の答えを学級の児童全員が先生の座っておられる教卓まで言いに行くシステムを作っておられ、学級経営での具体的な技を間近で学ぶことができたことはとても大きな収穫である」等担任教師から学んでいた。【学級の課題を個人の問題として考え解決させる技】では、「担任の先生は学級内での様々な場所で課題が見つかるたびに、どうすれば解決できるかを全員で話し合いながら、児童一人一人が自分の課題として捉えられるように徹底していた」等集団作りを担任教師から学んでいた。【困難をかかえた児童の学級での居場所作りの技】では「自己肯定感が低くプリントに死と書いたり、大きな声で不満を言ったりする課題を抱える児童に対する褒め方で、日常の中で褒めることももちろんあるが、授業中に児

童を褒めるということを常に意識されていた」と担任教師から学んでいた。

《指導のバランス》では、【担任教師の指導のバランス】【担任教師の存在と安心な学級作り】が示された。大学院生は実習Ⅱを通して、「児童を指導することに関して叱る・褒める、厳しさ・優しさについて何度か触れているが、どちらが大切かというのではなく、どちらもバランス良く兼ね備えていることが重要なのだと改めて考えさせられた」と【担任教師の指導のバランス】を明らかにした。そして、「担任教師をはじめ、学級の中で自分の存在を認めてくれる人がいる、という安心感があるのと無いのとでは、児童の持つ自己存在感や自己肯定感の度合いが全く違うように思われる」等と【担任教師の存在と安心な学級作り】を感じていた。

その他の概念として、大学院生の《次への課題と対策》が示された。そして【授業における多様な課題】【学級集団と多様な個性と課題をかかえた児童の指導】【児童への先入観の反省と児童理解】【多忙さへの対策】が明らかになった。【授業における多様な課題】では、「児童と向き合う余裕を持てるように授業力を向上させていくことも学級経営につながっていくということに今回の実習で気付くことができた」等学級経営における学習指導の課題を感じていた。【学級集団と多様な個性と課題をかかえた児童における集団作り】では、「学級の中には様々な個性の児童がおり、それぞれ異なった課題を抱えているが、このことを把握し、その児童に今必要な力をつけることが教師の役割であると考えているがとても難しい」と課題を示した。【児童への先入観の反省と児童理解】では、大学院生は「また〇〇君は△△をしているのか…というように、先入観だけで判断して注意してしまうこともあった」と児童の理解、アセスメントの難しさを感じていた。

4. 考察

(1) 実習と学級経営領域の演習のつながりによる効果的な学び

木下・江川・藤原(2015)はストレートマスター1年生を対象に学級経営のイメージの変容を明らかにしている。そこでは、小学校教諭だったメンターが、学級経営について説明している。結果として、ストレートマスター1年生は、学級経営のイメージとして「安心」「自己発揮」「自尊感情」のカテゴリを抽出している。同様に、本研究の第4回調査では、学級経営領域授業に、担任教師の行う学級作りの演習を取り入れたことにより、《学級経営年間計画と安心な学級作り》《指導のバランス》により【担任教師の存在と安心な学級作り】のカテゴリを抽出している。

そればかりでなく第4回調査では、第1～3回調査にあった学級経営における大学院生の《葛藤》が顕著に示されていなかった。特に、第1回調査では「学級崩壊」について、6名の大学院生が不安を述べている(石川, 2015)。第4回調査では、不安が顕著に示されていなかった理由として、学級経営領域授業の理論や演習と、実習Ⅱが具体的な学びとなり、学級経営の方向性や対策を見いだすことができたためではないかと考える。当初大学院生の学級経営観が抽象的だったものが、明確化され、さらに何らかの目標が見て具体化されたためだと思われる。実習Ⅱ後の第4回調査では、大学院生は《学級開きからの学び》では、【学級開きの意義の理解】【発達段階に応じた指導】を明らかにしている。具体的には「学級経営を学級開きから見せていただき、先生がどういった考え方で、どのような方向性をもって児童達を導いていこうとしていらっしゃるのかを間近で知ることが出来たのが今回得た学びの1つである」と述べている。さらに、大学院生は「先生方が4月の段階で取り組んでいる活

動の実態と、それに伴う児童集団の変化を確かめることができた」「4月当初は新しい友達や先生ということで緊張している様子があったが、教師がこのような学級を作っていきたいと具体的に口にするので、児童もまとまっていった」と述べている。学級開きからの担任教師の教育目標とそれに伴う児童集団の変化、そして、過去に自分が行った学級開きの演習が重なり、学級経営観に学校現場に即した学級経営の方向性や対策が見いだされて、葛藤の減少につながったと考える。Hammond & Snowden (2005) は、教師教育の教育方法について、教師が実践のなかで実践から学び教師の能力を支えることを目指している。実習と大学院生の演習を同じものにして、同級生や現場の教師から学ぶことは、大学院生にとって異なったアプローチや方法から、教育に必要な概念を抽出することができる。大学院生が自分の学級経営演習を批判的に捉え、学び続ける教師として育つ一助になるであろう。大学教育と実習との連続したカリキュラムは、有効な教師教育に必要であると考えられる。

本研究で取り上げた実習Ⅱの内容は、4月よりの学級開きからの学級づくりであった。大学院によって、実習時期が異なる。学校現場には、担任教師が学級作りを行う特別活動等がある。したがって、学級経営領域授業に実習時期に即した学級作りの演習を取り入れることが望ましいと思われる。学級経営領域授業に実習時期に即した学級作りの演習を取り入れる、大学教育と実習との連続したカリキュラムは効果的な学びとなると思われる。

(2) 学級経営の理論の整理について

CiNii で、タイトルに学級経営を含む論文（以下学級経営論文と記す）を検索すると、1945～2014年間で1371論文あった。筆者が中央教育審議会の学級経営領域カリキュラムや学級経営の論文・著書から頻度が高い単語を選びキーワードとした。そして、学級経営論文の中で、タイトルに頻繁にでてくるキーワードが19あった。「学年」「担任・教師」「学習・教科」「特別支援教育」「学校経営」「集団」「子ども理解」「生徒指導」「個性・個人」「道徳」「目標・計画」「特別活動」「学級崩壊」「アセスメント」「社会スキル」「いじめ」等であった。このように学級経営論文にも、多くのキーワードを含むことが示された。文部科学省は、学級経営の定義も内容も明らかにしていない。また、木下・江川・藤原 (2015) も、学級経営には授業実践のように何をすべきかという学級指導要領や教科書類がいつさもなく、当該学級を単にする教師の意向に添って実施されると述べている。

安藤 (2013) は「学級経営学という体系化された研究領域は、現在のところ存在しているとは言い難い。学級経営の重点やめざすべき目的、目的を達成するための教師の職能や指導技術など、さまざまな『学級経営実践論』に関する知識は蓄積されてきたが、それらはそれぞれに独自の子ども観や教師観を基盤とする学級像に基づく方法論の主張であった」として、教師の教育観の多様性から、体系化の難しさを指摘している。佐藤 (2015) が述べるように日本の教師の危機の本質は、教師教育（研修）の高度化と専門職化の著しい遅れにあるとするならば、学級経営の理論を整理する必要があると考える。

本研究において、第3回調査における学級経営領域授業後の学級経営観では「担任力を高める発達・学習の理論」「児童の多面的理解と方策」の理論面のカテゴリーが抽出された。実習後Ⅱ後の第4回調査の学級経営観では、理論面では、【発達段階に応じた指導を具体的に学ぶ】というカテゴリーのみ抽出された。さらに、実習後の第4回調査の学級経営観では「次への課題と対策」「児童への先入観の反省と児童理解」がみられた。また【個人を生かす集団作りの技】のカテゴリーが抽出された。発達の理論、子ども理解の理論は、大学院生の第3回調査だけでなく第4回調査でも表れたように、

学級経営には必要な理論であろう。本研究のようにこれから教師になる者や教師を対象に、学級経営観の調査を行い、学級経営において重要な理論を明らかにして、学級経営領域授業や研修を充実する必要がある。学級経営の理論面の精査が必要である。

(3) 反省的教師を育てる学級経営領域授業と実習

佐藤（2015）は、どの国の教育改革においても教師の専門家像は「反省的専門家（リフレクティブプラクティショナ）」に求められ、その実践的な知識と見識に求められてきたと述べている。佐藤（2015）は、教師の専門職性の一つに、実践的知識をあげている。実践的知識とは、理論的知識と異なる性格を有する実践において機能する知識のことである（Schwab,1983）。実践的知識・理論的知識のあらゆる知識と経験を総合し、行為の中の省察し、科学者の研究と結びつける見識が必要で、それを行うのが反省的教師である。

葛上・豊城・岩久保（2007）は、学部3年生を対象とした調査で、反省的リフレクションと、技術的リフレクションの2つのタイプの学生を報告している。反省的リフレクションとは、子どもの反応から教師側のねらい（授業計画や目標）について問題を認識するタイプである。技術的リフレクションとは、指導技術によって、解消しようとするタイプである。そして、反省的リフレクションのタイプの学生は、児童理解力、授業構成力、学級経営力とも高い力量を持っていたと報告している。本研究の大学院生は、技術面だけで学級経営観を捉えている者はいなかった。大学院生は、4月からの実習を進展させ、《学級経営年間計画と安心な学級作り》で、【担任教師から児童への積極的な関わりの必要性】を明らかにしている。子どもの理解にもとづいて、1年間の計画と見通しということに気づき、学級経営観を深めている。つまり、本研究の大学院生の学級経営観は、子どもの反応から教師側のねらい（授業計画や目標）について問題を認識するタイプ（反省的リフレクション）であると考えられる。学級経営年間計画案作成も同様に、学級経営領域授業で演習を行ったものである。学級経営領域授業と演習そして実習が、教職に関わる科目を統合し、技術の問題だけでなく子どもの反応から教師側のねらいについて問題を認識させる反省的リフレクションを生んだ可能性がある。

「4月のはじめには作業の取り掛かりに長い時間を要していた児童も、5月の終わり頃では自分たちで気づいて素早く行動に移し、周りにやさしく声掛けをしている姿が多く見られた。他の実習生が担当していた学級では、学級内のルールや、授業・給食・掃除等の活動の取り組み方などの“学級内規律”を具体的に明示し、徹底して児童に守るように指導していたところもあった」「児童を指導することに関して叱る・褒める、厳しさ・優しさについて何度か触れているが、どちらが大切かというのではなく、どちらもバランス良く兼ね備えていることが重要なのだと改めて考えさせられた」と授業規律だけでなく、《指導のバランス》と捉えていた。学級経営領域授業では、児童生徒の育ちのために必要な機能として、管理的機能・受容的な機能、ユング的には父性・母性、フロイトでは現実原則・快楽原則を紹介した。さらに、学級経営は、教科指導・生徒指導等を統合したものである。学級経営領域授業と実習Ⅱでみた担任教師の実践は、理論と実践を統合しに実践を省察する機会となったと考える。そして、本研究の大学院には《担任教師の個性に合った技を持つ》という技術的リフレクションもみられた。理論的知識と実践的知識を統合し、反省的リフレクションと、技術的リフレクションの2つを身に付けたことは、反省的教師への可能性を示していると言える。

5. おわりに

大学院生の学級経営領域授業後と実習後の学級経営観の変化過程を検討した。学級経営領域授業の演習と実習を組み合わせることによる効果的な授業、「発達」「個人と集団」「子ども理解とアセスメント」が若手教師における学級経営の基礎理論になる可能性、教育に必要な概念を抽出し反省的教師の育成の可能性を示した。しかし、本研究は特定の大学院生の研究である。これを大学院生の学級経営観として一般化することはできない。複数の教職大学院生を対象とした、大規模調査が必要である。また、実践的認識論定着のためには、教材となる最低1年間の学級経営の事例が多数必要であり、時間がかかると思われる。さらに、研究協力者9名の教員就職後、どのように変化するか追跡調査も必要である。

謝辞

本研究を進めるにあたって、研究協力者となった大学院生や実習のご指導にあたった先生方に心よりお礼を申し上げます。

引用文献

- 1) 安藤知子 (2013) 「学級経営論の展開から何を学ぶ—専門職業人としての教師の実践と研究」 蓮尾直美・安藤知子編『学級の社会学』ナカニシヤ出版, 15-23.
- 2) Dnezin, N.K. (1989) *Interpretive interactionism*. Thousand Oaks: Sage.
- 3) Hammond, D.L., & Snowden, B. J. (2005) *A good teacher in every classroom*. San Francisco, CA: Jossey-Bass.
- 4) 石川美智子 (2015) 「小学校教職専門実習における学級経営観の変化 担任教育に着目した教職大学院生1年生の質的研究」『京都教育大学紀要』127, 93-102.
- 5) 川喜多二郎 (1967) 『発想法 創造性開発のために』中央公論新社
- 6) 木下光二・江川 克弘・藤原伸彦 (2015) 「学級経営のイメージを明確化する授業における院生の変容の実態」『鳴門教育大学研究紀要』30, 124-146.
- 7) 小林博典・橋口泰宣・水落芳明 (2010) 「教職大学院における TV 会議を活用した多地点間の交流授業」『日本教育工学会第26回全国大会論文集』
- 8) 葛上秀文・豊成哲・岩久保和義 (2007) 「児童理解力, 授業構成力, 学級経営力を高める教育実習後指導の在り方に関する研究: リフレクションの内容の類型化」『鳴門教育大学学校教育研究紀要』22, 41-50.
- 9) 文部科学省 (2006) 「今後の教員養成・免許制度の在り方について (答申)」
- 10) 文部科学省 (2008) 『生徒指導提要』
- 11) 佐藤学 (2015) 『専門家としての教師を育てる 教師教育改革のグランドデザイン』岩波書店
- 12) 下地敏洋・城間盛市 (2010) 「教職指導と学校教育実践研究の概要」『琉球大学教育学部教育実

実践総合センター紀要』17, 27-39.

- 13) 塩満卓 (2013) 「カードワーク」 田中千枝子編『社会福祉・介護福祉の質的研究法』中央法規出版, 79-97.
- 14) 住野好久・田中吉資 (1999) 「教育実習と教員採用試験模擬授業 対策との結合：教育実習事後指導における学級経営等に関する模擬授業の試み」『香川大学教育実践研究』31, 33-45.
- 15) 山本登志哉 (1995) 「生涯発達のための観察法」 無藤隆・やまだようこ編『講座生涯発達心理学 1 生涯発達心理学とは何か：理論と方法』金子書房, 204-214.